近代建築史上の保険会社(4)　第二世代の建築家_伊東忠太

ある友人を、自転車と徒歩の違いに関する質問で困らせたことがある。10 キロの距離を移動するのに徒歩よりも自転車の方が簡単だが、徒歩では自分の体重を運ぶだけなのに、自転車では自分の体重の外に自転車までをも運んでいる。これはどうしえなのか、という質問である。用意していた答えは、自転車のタイヤが摩擦を減らしているためだ、というものだったが、彼はその答えに納得していなかった。かくいう私も彼をだましたような気分だった。年月がたって、ようやく彼に納得してもらえそうな答えがひらめいた。

そのきっかけは、職場の女性のフルマラソンへの挑戦だった。彼女の挑戦が心配になって、陸上部に所属する学生に大丈夫なのか聞いとところ、彼は、その女性が痩せているのかどうかを聞いてきた。マラソンは、体力ばかりではなく、腰や膝の耐久力が大事なので、太っていると負担がかかって完走するのが難しいとのことである。

マラソンが大変な理由は、体重を自分の膝が支えて移動をするためなのだ。これに対して、自転車は自分の体重をサドルが支えてくれる。その上で、タイヤが摩擦係数を小さくしてくれるので重い自転車と一緒でも楽チンなのだ。

小さな疑問というのは、思い続けていれば、いつかは解けるのだと思った。しかし、答えようと思った時には、彼は故人となっている。人生とはそんなものかもしれないと思いつつ、アカデミズムに失望し予備校教師として生活していた、純朴な彼を偲ぶ。

この連載では、日本の近代建築史に名を残した人々の中で、保険会社の建築と関係の深かった建築家を紹介してきたが、建築史には知られざる多くの建築家がいるのだと思う。中には早世した私の友人のようにアカデミズムに失望して、民芸家のような設計者として暮らしている人もいるのかもしれない。今回紹介する伊東忠太は、履歴でいえばアカデミズムで功なり遂げた建築家である。しかし彼には堅苦しいアカデミズムという形容詞はふさわしくない。

伊東忠太は、1867 年山形県米沢に生まれ、父親の転勤で千葉県の佐倉で少年時代を過ごした後、帝国大学工科大学（現在の東京大学工学部）を卒業して同大学大学院に進み、後に工学博士・東京帝国大学名誉教授となった。当時の建築家は、建築の研究のために欧米に留学するのが常識だったが、彼は日本建築のルールを追い求めて、中国・インド・トルコを探検した。建築家の藤森照信氏の講演によれば、伊東忠太は、奈良の法隆寺の柱がエンタシスとよばれる形状の古代ギリシャの柱に淵源があるとの仮説を証明するために、シルクロードを探検したという。結局、彼は自分の仮説を証明できなかった（HQ vol.1 創刊号 August 2003 を参照。なお HQ のバックナンバーは、次のサイトで公開されている http://www.hit-u.ac.jp/hq/vol046/index.html）。しかし、この経験をもとに彼独自の建築論を展開し、またユニークな建築物を数多く残した。

代表作の一つは築地本願寺である。築地本願寺は、京都の西本願寺を本山とする浄土真宗本願寺派に属するが、その本堂は仏教寺院に関する既成概念を覆るような様式である。

外部から見ると、イスラム系の寺院と見まがうような、「古代インド様式」の石造り寺院であるが、内部は伝統的な真宗寺院の造りとなっている。この本堂は、関東大震災で焼失した旧本堂の後に、伊東忠太によって設計されたものである。落成は、1934 年（昭和 9 年）。

築地本願寺の設計を手掛けたのは、中国やインドに仏蹟の発掘調査のため調査団を結成して探検していた西本願寺の大谷光瑞との機縁である。

建築をめぐる大谷と伊東の関係は、1907 年（明治 40 年）から始まった二楽荘の建設にさかのぼる。伊東忠太は、大谷からの依頼で二楽荘の建設に顧問として助言を行った。その後、築地本願寺の大建築の前に、真宗信徒生命保険株式会社（以下、真宗信徒生命と略称）の本社の設計が伊東忠太に任された。同社は、1895 年（明治 28 年）に、浄土真宗西本願寺派の門徒を保険契約者とする生命保険会社として設立されていた。同社は、初期の営業に成功し、さらにその発展の基礎を固めるために、1912 年（明治 45 年）に京都に本社を新築した。この建物は、本願寺伝導院として現存する。

伊東忠太の建築物には寺院やメモリアルな建物が多く、師匠の辰野金吾と比べてビジネス関連の建築物が少ない。真宗信徒生命の本社は例外的なものである。社屋は、掲載した画像でも判るように、ドームをもった角地の構造である。この構造は、他の保険会社の社屋（連載第 7 回の「愛国生命本社」や連載第 10 回の「日本火災本社」）と共通するもので違和感はない。しかしながら、新築社屋の絵葉書、および裏側からの写真にみられるように、不釣り合いなほど大きなドームが特徴的であり、また屋根と壁面の彩色、そしてサラセン風の装飾などに、彼の個性が強烈に現れている。彩色について補足すれば、ドームの屋根は緑色、ドームの壁面は黄色であり、赤レンガに白い帯を配した建物本体と鮮やかなコントラストである。しかも建物の周りには、画像のような怪獣の彫刻がみられる。

残存する平面図に見る限りオフィスの機能は十分であったように見える。真宗信徒生命は、その後、1914 年（大正 3 年）教保生命と名称を変更し、1921 年（大正 10 年）には久原房之助が経営を引き受けて本社を東京に移転し、1934 年（昭和 9 年）に野村財閥が経営を継承して野村生命となった。さらに 1941 年（昭和 16 年）には、戦時期の産業統合政策の一環として、仁壽生命および日清生命を合併し、戦後の東京生命の前身会社となった。

最後に、伊東忠太の残した最も美しい作品のひとつである一橋大学の兼松講堂について触れておきたい。この講堂は、関東大震災で甚大な被害を被った東京商科大学が一ツ橋キャンパスから国立（当時の谷保村）に移転するに際に建設されたもので、1927 年（昭和 2 年）に竣工した。伊東忠太の個性の強い威容を誇る外観ではなく、緑の多いキャンパスになじむものである。しかし兼松講堂には、築地本願寺や本願寺伝導院以上に、数多くの怪獣が潜んでいる。大学には、保険業や宗教以上に、魔物が多いということなのか。生きていたら、伊東忠太に聞いてみたいところである。

真宗信徒生命保険新築社屋（明治 45 年）

本願寺伝導院（旧真宗信徒生命本社）裏側から著者が撮影。

本願寺伝導院（旧真宗信徒生命保険本社）の怪獣の彫刻（著者撮影）